

へ現にや安楽世界より 現にや安楽世界より 今此の娑婆に 姿現して
我れらが為の観世音 仰ぐもおろか守るなり

へ東をはるか見ながせば 東をはるか見ながせば 宝の船がはしりくる

白がねの帆柱に 綾と錦の帆をかけて ともに大黒なが恵比須 こなたのお家に走りこむ

へ海老どのや 海老どのや 海老どのや 海老どのや 幼少よりひげ長し 年もとらず腰まがる

腹には大きな浪をよせ あら目の出たや 御目出たや

へ永き命をくみてしる 永き命をくみてしる 心の底のくもりなき 月の柱の光ぞめ

朝夕なるる 玉の井の 深きちぎりをたのもしや

へ此の家は黄金垂木に ひわだぶき 此の家は黄金垂木に ひわだぶき 金の柱に銀の梁

戌亥の隅に瓶七つ 白金のまげ柄勺 黄金の桶に雲もよう

へ向うはるかに見ながせば 向うはるかに見ながせば 島かと思えば船である

積みたる荷物は米と酒 七福神のうわのりて こなたのお家にはしりこむ

へ御体は氏神の 御体は氏神の 神も明神ましませば 尚も氏子は榮えける

行く久しきぞ まもるらん

へ袖をつらねて行く末の 袖をつらねて行く末の 雲かと思えば八重一重 咲く九重の花盛り

名ににおう 春の景色かな

六 伝 説

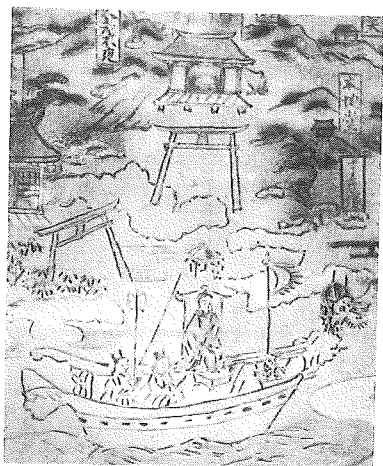
諸富町には神仙思想と結びついた地名(浮盃・寺井) 伝説や動植物(エツ・片葉のアシ)の発生的伝説など特色のある伝説を伝承している。

なお、民話については佐賀県立佐賀東高等学校郷土研究部が町内全域にわたって採集された『諸富の民話』(昭和五十四年三月発行)を参照願いたい。

1 徐 福 渡 来

佐賀県立博物館に畳一畳ほどの『金立神社縁起図』が保管されている。『徐福渡海縁起図』とも呼ばれ、下段に船四隻に乗った徐福一行が浮盃江に上陸しようとする様子が鮮やかに描かれている。

約二千二百年前、中国統一の偉業をなしたげた秦の始皇帝は栄華の日々を送っていたが、自分が年をとることと死に近



徐福上陸の図

づくことは如何ともしがたくこの不安からのがれようというるなでだてを考えさせた。

古来より中国には不老不死を願う神仙思想があり深山の奥に住む仙人が不老不死の霊薬をつくっているという伝えがあり、始皇帝は神仙の術を行う方士と呼ばれる者にこの霊薬を探すように命じた。

方士の一人である徐福が「東海に蓬萊島あり、島上に仙山あり、山上に仙草あり、食すれば不老不死を得る」と進言した。そこで徐福は金銀珠玉に飾りたてた船二十艘に少年少女や供の者数百人を乗せて蓬萊の島をめざして旅立った。

徐福一行がまず着いたのは杵島の竜崎(杵島郡白石町)であつたが上陸に適さなかつたので、徐福は大きな盃を海に浮かべ流れつくところから上陸することにした。盃は流れ流れて筑後川下流の擲に辿りついた。浮かべた盃が流れついたところから、この浜を浮盃というようになった。

上陸しようとしたとき、暴風雨となり船が転覆しそうになつたが、アミが船の間にびっしりとつまつて転覆をまぬがれたため擲の人々はその後、アミをとらなくなつたという。

徐福は生い茂るアシの葉を手でかき払つて上陸したので、葉が片側だけにつく片葉のアシになつてしまつた。一行は上陸すると手水を使うために井戸を掘り、その井戸水で手を洗つたので手洗いの井、その音が訛つて、てらい(寺井)の地名になつたという(昭和二年、園田秀次氏宅の床下から発見された井戸を徐福の掘つた井戸と伝える)。

徐福たちは、擲に滞在していたが網につける柿の渋の臭いにかまんでできなくなり、また、不老不死の薬も早く探さなければならぬので、蓬萊山に似ているという佐賀平野の北方にそびえる金立山めざして旅立った。

(さらにこの伝説には、徐福が千反の布を敷いて通つたという千布の地名や茶屋の娘お辰との恋物語などがある)。

2 弘法大師とエツ

日本では筑後川川口だけにしか住まないというエツ(斉魚・刀魚・銀刀魚などと充てる)は、カタクチイワシ科の魚で体長三十一四十センチほどで身は薄く銀色の細かなウロコにおおわれた表面は透き通るように鮮かである。四月下旬頃、川をさかのぼつてきて六月から八月にかけて下流の水域で産卵する。諸島橋の上流から下流数キロにかけてサシ網で獲る。

料理法は刺し身・あらい・煮物・塩焼き・あらだき・てんぶら・南蛮漬け・酔のものなどで、小骨が多いので裏表に二百回以上の包丁を入れる。アシの葉をおもわせるこの魚には叙情的な伝説がある。

約一四〇〇年前、初夏の激しい雨の日、筑後川の川口に一人の旅の僧がズブぬれになつてたがずんでいた。みれば身なりは貧しくお金も持たない様子である。向こう岸へ渡ろうとしたが誰も相手にしてくれなかつた。見かねた近くの老漁師が自分の舟で渡してくれた。この老人の親切に感謝した旅の僧は、お礼に「魚のとれないときは、この魚をとりなさい」と岸辺のアシの葉をとつて川に流した。アシの葉は魚に姿を変え群れをなして泳



エ ッ

宗教



慈広寺境内太田鍋島家廟所

いでいった。この貧しい旅の僧は九州を行脚していた弘法大師だったという。

また、徐福が上陸するとき押しつけてきた片葉のアシの落ちた部分がエツになったとも伝える。

3 千人塚

諸富橋の近くの川沿いに享保六年（一七二一）に建立され

た「南無阿彌陀佛三界萬霊等」と刻まれた一七〇^モ余りの石碑が建っており、地元では千人塚と呼んでいる。

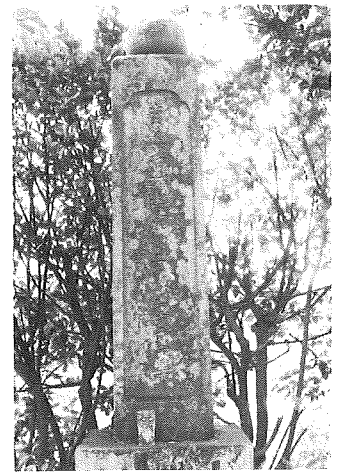
享保年間（一七一六―一七三五）の大飢さんには疫病がまん延し餓死者が多数出たといわれ、これらの人々の霊を慰めるために建立したと伝えられている。

一人の旅の僧が筑後川のほとりにたずんでいた。打ち続く凶作に人々は食物や水を求めてさまよっていた。また、戦国時代にこの辺一帯で合戦があり、討ち死にした者が多数埋れており、村人は幾度となく白骨や火の玉を見たという。僧はこの村に宿る怨霊を追う決心をし村人と相談し「三界萬霊」と刻んだ石碑を建てて、餓死者をはじめすべての霊を慰め、再び流浪の旅を続けたという。

また、一説には往昔、斬罪の地といわれ、その数が千人に及んだので千人塚というとも伝える。

碑銘

莫謂西方遠 南無阿彌陀佛三界萬霊等 唯須千念心 享保六歲^次辛丑九月十五日 本願施主圓達



千人塚 (石塚)